

おにき まこと
鬼木 誠

物語とリテラシー

●自治労・書記長

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

本年が皆さんにとって健やかな一年となりますことを心よりご祈念いたします。

これを書いているのは11月。さて2019年の紅白歌合戦はいかなる具合であったろうか。若いころは毛嫌いしていた紅白歌合戦だが、ここ数年、大いに楽しみにしている。歳相応に落ち着いたわけではない。乃木坂46の雄姿を観るためである。特に今年は、坂道シリーズ（乃木坂・櫛坂・日向坂）がはじめて勢ぞろいする。コラボ企画などあれば、と楽しみが広がる。

こう書くと、「いい歳をして」という声が聞こえてくるようだ。アイドルの話をする、必ずこのような不寛容に出会う。もはや慣れてきた。この不寛容を責める気にならないのは、多くの人が「アイドルグループリテラシー」を持ち合わせていないことが明白だからである。理解が及ばないことに対し、人は否定・拒否する傾向にある。いずれにせよ、貧しきは罪ではない。

ここでいうリテラシーとは、読解力、文字通り、読み解く力を指している。作法といってもいい。そのカテゴリーや個々のグループ等の活動を「物語」としてとらえ、理解し、共感する能力・感性といえは分かりやすいだろうか。例えば高校野球、例えばアーティスト、例えばプロレス。私たちは自分の好きなもの、愛するものを物語として読んでいる、と思っている。

私は、いわゆる「昭和プロレス」が大好き

だった。当時、プロレスラーは格闘家として、と同時に語り手としてあった。力道山の物語は猪木と馬場の物語へとつながり、やがて多くの語り手による壮大な物語となった。プロレスラーとしての技量はありながら語り手としての能力に欠ける者、物語を生み出せない者は時代を制することができなかった。藤波辰爾の悲劇はここにある、と思っている。日本のプロレスはアメリカプロレスの勧善懲悪という単調な物語から脱却することで独自の発展を遂げた。「勝ち負けではなく強弱を観る」「結果ではなく過程を観る」「試合だけでなく試合の背景を観る」。このような見方が成立するのは、語り手の巧みな技術だけでなく、読み手のリテラシーの発達によるところも大きい。今日なお続く格闘技ブームは、プロレスの物語性の発展とプロレスリテラシーの一般化・普遍化の産物と言えるかもしれない。

アイドルグループの物語性もまた旧来のアイドル物語のシステムを超えることで大きく前進した。かつてのアイドルは個人、もしくは少人数のグループ、そして雲の上の人たちだった。そこに多人数グループという新しいスタイルと親近感あるアイドルというコンセプトがおニャン子クラブによって持ち込まれた。秋元康によるこの革命的なシステムは今日の「会いに行けるアイドル」に発展する。会いに行けるということは、単に身近に見られるということではない。ファンにとっては、その物語に参加できるということである。単



なる読者・観客ではなく、端役ではあれ登場人物になれる。その感覚は、RPGや育成ゲームに似ているかもしれない。そして多人数アイドルならでは語り手の多さ、多様な語り口が、これまでの単純な主人公の成長物語をより複雑にし、時として登場人物にもなりうる読み手もまた、その多様さ複雑さに対応していくこととなる。

「推し」という言葉がある。そのグループのどのメンバーを応援しているか、ということを目指す。これは、そのアイドルグループの物語を「私は誰を主人公として読んでいます」ということに他ならない。生駒推しは生駒里奈を主人公として、白石推しは白石麻衣を主人公として乃木坂46物語を読む。物語は、読み手によって主人公を変え、プロットを変え、結末をも変える。一般にも有名になった「センター」という言葉だが、言葉の定着とともに誤解も広がった。「センター」は物語の主人公を指す言葉ではない。「センター」は重要な要素の一つではあるがすべてではない。アイドル成長物語は単にセンターを目指す物語ではないということが、これまでのありがちだった成功譚からの最も大きな変化であり、アイドルグループリテラシーの重要なカギでもある。

話は少しそれる。乃木坂46の前に一世を風靡したAKB48の総監督であった高橋みなみは「努力は必ず報われる」と言い続けた。美しい言葉に聞こえなくもない。しかし、彼

女は総監督という立場から、結果として報われないメンバーの努力を最も見続けてきたはずだ。「努力は必ず報われる」という言葉は、「あなたが報われないのは努力が足りないからだ」という言葉の裏返しに過ぎない。レッスンの場でメンバーを鼓舞する言葉としてならまだいい。しかし、高橋みなみは、総選挙の順位発表の場でこの言葉を発し続けた。総選挙は、ファンの投票数で順位が決まる。わかりやすく言えば、ファンにいくら金を使わせたかが順位を決する。総選挙の場で彼女が発したあの言葉は、成績が残せなかったメンバーとそのファンにとって、きわめて残酷であつたばかりでなく、「AKB物語」の裏面をも知らしめることとなった。彼女は、総監督として物語全体の今後の構成にも意見を言える立場にあつた。だからこそ彼女は、「結果として報われない努力もある。それでも努力は美しい。」と言うべきではなかったか。光の当たらないメンバーとそのファンにも幸せな物語を続けさせるべきだった。

さて、翻って、私たち労働組合はいかなる物語を紡ぎだしているだろうか。組合員がワクワクする参加型の物語となっているか。いや読者は組合員だけではない。働くものすべてが胸躍らせ、希望を見出し、その物語の一員になりたいと思うような、心に届く物語を語らなければならない。簡単ではないかもしれないが、少なくとも、それを語るリテラシーだけは持っていると思いたい。